

## 西洋近代の再定位にむけて：言語ゲーム論からのアプローチ

於・一橋大学 1988.11.6

橋爪大三郎

## §0 「言語ゲーム」をご存じですか？

今日は「西欧近代の再定位に向けて」というタイトルでお話しします。西欧、ヨーロッパというものが、地球上の文明でも普遍的なものである、という顔をしている。それに対して反省といえますか、そういうことが正しいのであろうか、という批判も近年様々な形で出されている。それについて言語ゲームの立場から何か発言できないでしょうか、という依頼がありました。普段、私はそのような発想をしていませんので、今回のために少し整理してみた、という次第です。

さて、おてもとのレジュメに沿って話していきますが、話しには二つの山があります。前半では、ヨーロッパ近代が普遍主義、普遍的である、と言われますが、それはどのような理由によるのだろうか、ということをお話しします。後半では、実はこのヨーロッパ近代が特殊なものであったんだ、決して人類を代表する普遍的なものではないんだ、とされる場合、どのような根拠でどのようにそう言えるのか、という話しをします。

この二つのことを考えるに当たって、言語ゲームを下敷きにしようと思うわけですが、このような講演会で困るのは、言語ゲームについてよくご存じの方ばかり揃ってらっしゃるのか、それとも今日初めて聞く方もいらっしゃるのか、私にわからない、ということですね。そこで、簡単に最小限のことを説明いたします。その上で突っ込み形で話しをしますので、多少分かりにくい、という方は、よろしければレジュメの下に書いてある私の本などをお読みいただければ幸いです。言語ゲームというものは、最近あちこちで活字になる機会も多いので、そういえばそんなものもあった、というような方も含めて大勢の方がご存じだと思います。

20世紀の哲学者でも非常に大きな存在で、ヴィトゲンシュタインという人がおりました。彼はウィーンで生まれてドイツ語圏で育ったユダヤ系の人で、ラッセルの門下に入りましたので、イギリスで勉強しています。イギリスにいるときは、講義や議論は英語でしつつノートはドイツ語で書く、というバイリンガルでして、終生ドイツ語圏からは抜けなかった人なんです。両国の間を行ったりきたりしています。彼はいろいろな意味でマージナルだったわけです。ユダヤ人という意味でもマージナルだし、彼がいたオーストリアという

一橋祭・社会科学研究会・講演会 於・一橋大学・国立・西校舎本館22 1988.11.6

## 西洋近代の再定位にむけて：言語ゲーム論からのアプローチ

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう)

## §0 前説 「言語ゲーム language game」をご存じですか？

## §1 普遍化的運動としての、西欧“近代”

## (1) 普遍性：近代「市民社会」の成立

市民～主体～自由～権利～理性 ↔ 権力～伝統～固有文化～共同態  
これにはいくつかの事柄がきっかけとなった ex人文主義/宗教改革/……

## (2) 資本主義：近代市民社会の実態

資本主義？ 世俗社会の合理化 意図せざる結果 産業革命  
×金儲け主義 ○賃労働市場・資本市場の成立⇒機械を中心とする協業=分業系

## (3) マルクス主義：資本主義の「批判」によって、近代を完成させる運動

科学的性格～「資本論」 秘儀的性格～弁証法・党 利潤動機=原罪  
社会主義的計画化 vs 市場の効率性 社会主義の行き詰まり “歴史”の解体

## (4) 構造主義：ヨーロッパ中心主義の相対化

←植民地支配の終焉・世界の多極化・マルクス主義の凋落  
フーコー：近代=“制度” 主体などは制度の産物にすぎず、通歴史的なものではない

## §2 特殊性として見た、“西欧”近代 ——言語ゲームとの関連で

## (5) キリスト教の遺産 [cf ヴェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」]

個別救済・禁欲・契約の絶対・人格と行為の区別・良心(宗教的寛容)・真理…

## (6) 言語ゲーム(言語の意味は用法にある) ↔ キリスト教(テキストの権威)

言語ゲームは、テキストと人間の関係を変化させる 脱・西欧的な知  
\* 仏教～悟りを訊ねあうゲーム⇒仏陀を標本とするゲーム ↔ 言語の記述公理  
\* イスラム教～厳密ルール主義+審判のいるゲーム⇒二重の幸福論 ↔ 二王国論  
\* 儒教～民衆の幸福を目的とする統一フォーマット ↔ 権力とテキストとの分離

## (7) 西欧近代のなかから、制度の普遍的な部品・装置を抽出し、新たな制度を構想せよ！

## §文献その他

橋爪大三郎「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」勁草書房、「はじめての構造主義」講談社。既発表・未発表の論文は、郵便局から「横浜3-50489 橋爪頒布会」宛てに二百円を払込むと、注文リストを送ってきますから、誰でも注文できます。

国家自身がだんだんゴチャゴチャになってしまう。イギリスに受け入れられたような受け入れられないような、英語圏の発想に取り込まれたような取り込まれないような、というような具合です。こういういろいろなきっかけから、ヨーロッパ文明に関してある意味で非常に深い洞察・反省を行う、そういう立場にいたわけです。また、彼の資質も、まっしぐらに進んでいくような、ある意味で破壊的な性格でして、自分の思考自身を自分の思考で壊して行くような迫力をもった人でした。哲学者としてはうってつけの資質だったので、こういった様々な事情が重なって、言語ゲームと呼ばれる一つの議論が出来上がった。

しかし、初めからヴィトゲンシュタインがそんなことを考えていたわけではありません。実は、これはかなり後の時期になって出てくる考え方であります。ヴィトゲンシュタインの仕事は大きく前期と後期とに分かれますが、前期の考え方は、写像理論と呼ばれるもので、ちょうど言語ゲームの反対の考え方といえるかと思います。つまり、言葉の意味を世界の実物や出来事と完全に対応させて理解していこう、という考え方です。例えば、コップという言葉が意味をもつのは世界の中にコップという存在があるからである。神という言葉が意味をもたないのは世界の中に神というものが存在として存在していないからである。こういう理解でもって伝統的な神学・形而上学などを批判しつつ科学を基礎付けていこうとしていたわけです。この若い頃の仕事はかなりうまくいって、業績も上がりました。すでに影響力をもった哲学になったわけです。

ところが、彼はその考え方自身に自分で大きな疑問をもってしまった。果して言葉の意味ってそんなものでいいのだろうか、そう考えて自分で考えが間違いである証拠を次々と見つけ出し、非常に悩みました。その結果、彼は発想を全部変えてしまった。つまり、言葉が意味をもつのは、何か実物のような、言葉の外側に根拠があるのではない、言葉を使うというその用法自体のなかに根拠がある、と考えるに至ったわけです。

例えば、コップならコップという言葉が意味をもつのは、ここにコップという実体がある、というように言葉の外側に根拠があるからではない。これがコップだ、というのは一つの約束事のようなものだということです。私がこれをコップと呼ぶからこれはコップになっている、皆さんもこれを、コップだな、そういえばそうだな、と思うからコップになっている、というわけです。そういう約束がなければ、これはコップでも何でもありません。これがコップである、というのは用法の中にある一つのファクターであって、なぜコップという言葉がこれを指していたのか、という根拠を探してもどこにも見当たらない。ただ、昔からそのように言葉を使っていたという慣習、伝統——そのほかなんと言っても構いませんが——そういうものがあるだけなんだ。そして、およそ人間の言葉や文化や振る舞いなどはみんなそうなっているんだ、という考え方に至った。これが言語ゲーム論の立場となったわけです。そうすると、これは今までの哲学とは大変異なった考え方ですから、そ

の影響から思想史上に様々なことが起きて参ります。私自身もインパクトを受けまして、社会学に新しい可能性を持ち込もうか、と考えているわけです。

言語ゲームというものが大体どのようなものか、お分かりいただけただけかと思いますが、この話しは今日の講演の後半に出てきますので、それまでは頭の隅に入れておいて下さい。

## §1 普遍化的運動としての、西欧“近代”

普遍化的運動としての近代、というのはどういうことかを考えてみましょう。我々は近代社会というものに住んでいるわけですね。我々は日本人であってヨーロッパ人ではないのですが、近代というものは非常に伝染性の強い一種の病気のようなものでありまして、ある半島ないし大陸の辺に発生してからどんどん移っていくんですね。まあ、アフリカとかラテンアメリカの方にあまり移っていないところもありますが、日本などは完全に巻き込まれてしまって、近代となっている。この一橋祭というのも近代の一環かも分からないわけです。そういうふうに、近代というものは非常に大きな運動になっている。確かに近代は何か特定の固有文化に限定されるものではなくて、ある共通する普遍性、どんな人間でも巻き込んでいける運動である。こういう意味で開かれた運動である、そういう性質があるように思われます。西洋も自分たちでそういうふうに申しますし、西洋以外の社会もヨーロッパの文明を見て、一種の憧れをもつ、「なるほど、素晴らしいものだ」と思う。これが普遍的であるということの意味合いかと思います。

### (1) 普遍性：近代「市民社会」の成立

では、その普遍性はなにゆえに生じるのか、と考えていきますと、それは近代というものが市民社会というものを成立させたからである。人間というのは何々族というものでもないし、貴族／平民、といったものでもない。そういうものは人間の本質とは何の関係もないのであって、人間の本質とは、例えば理性や自由といった、すべての人間に兼ね備わっているものである。人間はそういう本来の能力を生かすように社会を生きる可能性がある。こういう可能性のある社会を市民社会と申します。このように人間が市民として生き始めた、市民によって社会を構成するというアイデアを生み出した、そういうところが西洋の普遍性たる所以ではないかと思います。我々の憲法もまたそのようにできているわけでありまして、このアイデアというのはいろんな意味合いでなかなかよくできているわけですね。市民というのはい人一人は人間なんです、人間がお互いを権利の主体として尊重しあい、良心の自由を守りあい、暴力に訴えず、手続きのない民主主義にしたが

って社会を運営する、そんなことをした場合に、市民としてお互いに立ち現れますが、そういう市民社会というのは、例えば封建的な社会、あるいはやや未開な社会、その他いろいろな社会を打ち砕いて広まっていく運動であるわけです。そして、人々はそれが良いものである、そこに解法を見いだすような可能性を人々に与えるようなものである——こういうふうと考えられるかと思います。こういう考え方は、何と申すか、ややグサイっていか古いですね。ポストモダンの人なんかには言わせると、こういうことを言っていたから世の中悪くなった、というようなことになります。しかし、私はあまりそうは思いません。こういう考え方（モダニズム）は、やはりもっと射程の長い、非常に大きな運動であると思います。ポストモダンというのは、いろいろな意味で太刀打ちしようとしているようですが、ちょっとまだ力不足ではないかと思うのですが、そのことはちょっとここでは関係ないので先へ進めましょう。市民という考え方はいろいろなものと相関項をもってあります。市民として生きなくちゃいけない、と考える人たちは人間というアイデアをもっています。つまり、ヒューマン=ビーイング、無色透明な人間という考え方ですね。それ以前は例えば王様と貴族と平民は全然違うものであり、奴隷というものがいてこれは全然違うジャンルである、また黒人と白人も全く違う、というように、いろいろな区画というものが社会の中に書き込まれていて、それは個人の努力では消せないものでした。市民という考え方はそうじゃない。これは人間だからだれでも市民になれる、市民になった途端に平等になる、生れついての人間の色分けやカテゴリーというのは世の中にあってはいけない、となっているわけです。このように考えていきますと、人間は奪うことができない権利というものをもっているということになる。それから、人間であると思わないのはもう迷信ですから、そういうものを剥ぎ取って行って、真理に目覚めていく。真理をわきまえるための理性というものも持っている。もっていない人は学校教育でもって徹底的にたたきこまなくちゃいけないわけです。また人間は一人一人が権利の主体であるから自分で決断しなければいけない。他の人に訊いたりしているようでは、自立していないわけですね。従って、みんな自分の行為に責任をもつような主体にならなければならない。こうして、市民というのは、ある意味では主体の運動である、ある意味では自由の拡張ないし実現である、ある意味では権利——法的に見れば権利ですけれども——の関係でもって、人間関係を調整して生きてゆくことである、また科学的な面から言えば、それは人間が理性的に振る舞うことである、というように連動してゆくわけですね。これは皆さんよくご存じのことと思います。

それに対して、市民社会は一つの運動ですから、当然敵というものがある。では何を敵として闘っていったかと言いますと、まず権力である。この場合の権力というのは、いわれのなき権力でありまして、例えばある人が王様であるがゆえに伝統的にその社会を支配

しているとか、ある人が土地をたくさんもっているがゆえに多くの人を従えている、というような権力です。そういったものはいわれのない権力でありますから、こういうのは打破しなければならない。しかし社会を維持するために権力というものはどうしても必要な場合があります。そこで権力というのは誰の手にも帰属しない、つまり手続きの中にあるようにする。権力というのは危険なものだから、手続きの中に閉じ込めてしまうんですね。これが民主主義の考え方です。裁判権と立法権、それから行政権は、なるべくバラバラにする。お互いチェックするようにして、暴走しないようにします。さらにそれぞれに法の支配ということを貫徹させて、個人が独断で勝手なことができないように法律のチェックを幾重にもかけておくわけです。これは社会的な防御装置であって、17、8世紀にいろいろな血みどろの闘争の結果、多くの思想家が生み出した知恵でして、これが、権力に対して市民社会が闘ったということです。闘った後ですから、市民社会は権力を自らの手に握ってなければなりません。それが国民主権ということの意味でありまして、危険な権力を一人一人がみんなもっている、ということですね。次に、伝統に対して闘わなければなりません。伝統というものはある意味で大切なものですがけれども、伝統であるがゆえに不合理なものが残存してはいけません。もし不合理だったり人間のためにならないものはどしどし変えていきましょう、ということになります。同時に、民族ごとの固有文化のようなものにこだわってはいけません。例えば方言のようなものはなるべく共通語にしましょう、という運動になります。それから共同体——例えば村のようなものです——のようなものを第一義的に考えて地域的にまとまってしまう、広く社会全体のことを考えないというのもあまりよくない。このように、人間の価値の重点がより大きな広い社会に移ってゆく。これは何千、何千万、何億という多くの人たちが連帯するために必要なことだったかもしれない。

ヨーロッパの人たちがこういう運動をなぜ思いついたのか、ということが次の問題になりますが、これには幾つかの事情があったようです。一つは、キリスト教との関係もあるんですが、たまたまイスラム文化の方からギリシャ時代の遺産が伝わってきて、人文主義ないしルネサンスが起こったとか、キリスト教内部で理性的な立場、つまり宗教改革派というのが出てきたとか、こういうことが原因にあるかもしれませんが、今日はここに立ち入らないことに致しましょう。

## (2) 資本主義：近代市民社会の実態

次に、資本主義の話をしていきます。今、市民社会ということがヨーロッパの普遍性の一歩の根本であると申しましたが、人々が市民として振る舞うと実際問題としてどういう世の中が出来上がるのかということについてまだ何も述べておりませんでした。しかし実際

に市民社会を運営してみて出来上がるのは資本主義であります。なぜそういうふうになるかという、市民社会の中では経済的な自由というものをみんなもっております。それは、結社をつくり、会社をつくり、資金を集め、企業を興して、利潤を追求する、というような自由です。そういう自由を、効率の原理に基づいて行っていくならば、より合理的に、より大規模に生産装置を動かした人々が勝利を取め、生産力を一手に握っていくであろう。こうして株式会社ないし資本主義的企業が出来上がっていくのは当然でありまして、結果的に資本主義社会というものが出来上がってしまうわけですね。これは市民社会を実現しようと思った人たちが意図した結果ではなく、何となく自然の結果であって、始めからこういう設計・計画があったわけではないのです。例えば現在の日本の法律の体系を見ても、資本主義なんてことは一言も書いてなくて、無体財産権とか手形法とか、そういうことに関連する法規があるだけなんです。それらが全体として機能した結果、資本主義が出来上がるようになっていくわけです。

このように、市民社会の実態とは資本主義である。この資本主義が何かということに関して、いろんな説明があったんですが、まだ決定打というのはあんまり出てないように思います。しかし、一つの説明としては、レジュメに「世俗社会の合理化」あるように、合理性ということがあります。効率を追及しないと資本主義は生まれません。効率を追及するためには、自分や他人の労働行為をチェックして、無駄がないようにしなくては行けない。そういうことはかなり神経を使うことであります。では、そういうことはどこで始めに開発されたかということ、ウェーバーという人の説によればそれは修道院の中である。修道院とは祈りのための装置ですから、自分によこしまな心が起きないように鐘で時間を告げ、自分を自分で監督しながら労働していたわけです。ここでは労働それ自体が喜びなのではなくて、労働は手段であり、神の栄光を増すための祈りの形式だったわけです。ところが、そういう修道院の中でだけ行われていたことが、宗教改革の結果世俗社会の中に広がってしまい、その結果、プロテスタントの国を中心にして資本主義が巻き起こった、こういうのが一つの通説であります。また、技術的に説明する立場もありまして、エネルギー革命や蒸気機関などという技術上の発明が突破口となって新しいマニュファクチャーとか工場制機械的何といったものが興りまして、順調に進んでいった、という考え方もございます。こういう考え方はある程度当たっているんですけど、今一つ事態の全貌をとらえていると思えないような感じもあると私は思っております。

資本主義というのは素朴に考えて何ですかということ、あまり社会科学を勉強なさらない方の場合、資本主義とは金儲け主義のことであるとか、“万事金の世の中”——これが資本主義だ、というようにお考えの方がいらっしゃるんですが、実は金儲け主義というのは近代だけではなく大昔からありました。これに対して近代資本主義というのは単なる金儲

け主義ではなくて、合理的に利潤を追及するということが重要であります。行きあたりばったりであったり、それから適正な価格を無視して暴利をふっかけたりというのは近代資本主義的行動ではないのであって、取引先との信義を守って適正な価格でもって売買をすることが大原則です。では正解は何かといいますと、これは私の、というか通説ですけど、当然その資本主義が成立するためには労働力自身が商品となる賃労働市場の成立が必要であり、その結果、労働力を大量に集める企業が可能になります。もう一つ、その資本を一箇所に集中するための資本市場、具体的に言いますと株式会社とか株式のシステム、それから商業銀行、特に預金銀行、こういったものが存在することが必要であると言っているでしょう。その他にどういう条件が必要かということはまだよくは詰められていないように思われますけれども、それをちょっと行為論ふうに言い換えてみましょう。まず機械というものがあります。機械というものは、人間の動作を越えて作動するような、かなり大きな秩序です。こういった機械を導入しますと、機械にいわば使われるというかくつつくような形でもって分業・協業が発展してゆく。ここでいわゆる資本——近代的な意味での資本——というものが成立する、というふうに発展してゆくメカニズムであろうと考えて良いかと思えます。

市民社会というのが非常に普遍性をもっている、と申しました。しかし、切り離せない側面として、資本主義として運動するということが実際にあったわけです。そうするとこれは意図せざる結果ですから、資本主義として市民社会が運動してしまうということが良いことなのか悪いことなのか、ということが大変問題となりました。そこで、19世紀から20世紀にかけて、この資本主義をめぐる大論争が起こり、一つの有力な立場としてマルクス主義が出て来た、こういうことになっているんじゃないかと思えます。そこで次にマルクス主義のお話を致しましょう。

### (3) マルクス主義：資本主義の「批判」によって、近代を完成させる運動

マルクス主義とはどういう運動であったか、あるいはあるかということが、今日ある程度理解し易い位置に我々はだんだん立つようになってきていると思えます。簡単に言いますと、それは資本主義社会を批判する運動である。市民社会は、その普遍性、つまり市民社会が自由である、など様々なプラスの価値をもっている、そういうところは良かったんだけど、意図せざる結果として資本主義を生み出してしまったところが良くなかった。なぜならば資本主義の下では人間は自由に労働することはできず、自分の生産物の価値をすべて自分のものとするのができない、つまり資本家に搾取されてひどい目に遭ったりする。ゆえに資本家はいない方が良く資本主義もない方が良い、こう考えるわけです。ですから市民社会でありながら資本主義を生まない社会というものを追及しなければならな

い、という運動です。そのためにはまず、資本主義を批判することが大切である。そして、資本主義を批判するならば、従って近代社会から資本主義の部分の根こそぎ取ってしまうことが出来得るならば、近代というのは完成して資本主義より更に一步先の段階にいくのである、これがマルクス主義の根本的な主張であります。そこで、この主張に従って運動が展開されました。

もしこの主張が正しいのならば、それは実現されなければならないわけですから、これは重要な問題です。そしてそれは当面賛成意見と反対意見のある議論でありますから、イデオロギーであります。そこでマルクス主義は説得力を高めるために科学というもの、市民社会の中で生まれた理性という制度を味方につけようとしたわけです。これが科学的社会主義ということですね。では、その科学性の拠ってきたるゆえんは何かというと、主としてマルクスの仕事に依拠することになります。つまり、マルクスの「資本論」の体系が資本主義の本質をついている、そして資本主義が人々を搾取するメカニズム、つまりよくないメカニズムであるということを示明しており、その結果資本主義社会が崩壊するということを予言している、これが真理である、科学的であるから科学的社会主義である、こうなっていると思います。

そうするとこれは科学であり一元論であっていいようですが、マルクス主義の中にはもうひとつ別の反対部分がある。その部分は何かと言いますと、弁証法の部分であります。最近では弁証法を勉強なさる方はあんまりいらっしゃらないかも知れません。僕は昔よく勉強したのですが、弁証法というのは実は形式論理ではないのでありまして、形式論理的には理解できるものではないんです。詳しく説明致しませんけれども、その弁証法というものはどうしても解釈が必要です。その解釈を誰が行うかってことが非常に重要になってきますが、結局それは党が行うことになりました。党というのは、何らかの基準によってあるヒエラルキーに人々が並んだものであり、解釈ないし何が真理であるかを認定する権利というものを配分する組織なんです。そういうものがマルクス主義の運動には必要である、となっているわけです。なぜ必要かということ、資本主義というのはイデオロギー効果をもっていますから、放っておいたのでは資本主義が悪いものであるということに人は気がつかない。商品社会で消費社会で物がたくさんあっていいなあ、などと思ったりするわけですね。そうではなくて実は悪いものだということをよく理解させるためには、解釈ないし真理が必要だ、それを供給するのが党である、という構造になっているわけです。これはある意味では教会と非常によく似ております。教会というのは、世俗の人間を放っておくと罪にまみれてしまうから、神の道に連れ戻すためにヒエラルキーを使って解釈を供給する装置であります。マルクス主義はこれとある意味で似ている。キリスト教の中にも三位一体説といって弁証法の論理が働いているんですけれども、マルクス主義の場合にも

科学のほかに、この弁証法の論理というものが働いている。科学だけだったら党はいらないのであって、弁証法があるから党が必要なんですね。党は現在もあるわけですから弁証法も働いているんだと思いますけども、この党は、結局人間の罪深い部分というものを指摘して資本主義を批判してまいります。では、なぜ人間は罪深くなるのかということ、利潤動機をもっているからであります。資本主義というのは利潤というものなしに動かないわけで、どの企業も利潤を上げようとして運動している。ところが、人間は生れついてからこのかた利潤を上げるようになっていくということはないわけでありまして、どこかでそう思い込みに違いないわけです。これはやっぱりよくない考え方を吹き込まれた、つまり資本主義ブルジョワの害悪であるから、こういうことを止めれば良い。従って、利潤動機をずっと追及してゆく。そして、資本主義と利潤動機が不即不離なものであるならば、資本主義というのは原罪にまみれていて罪深いわけですから批判の対象になると、こんな形になっていると思います。

このように考えますと、これで非常に良いようでもありますけれども、実際問題として、マルクス主義が想像したように世の中があまり展開しては行かなかったということから、マルクス主義はちょっと調子が悪くなってきます。例えば、資本主義を止めてしまったら社会主義でやらなければなりません。つまり計画です。そこで、計画と市場の効率性競争というのがありました。始めは計画の方が大変好調で、ソビエトの五ヶ年計画がジャンジャンうまくいって、非常に順調だったんですが、最近うまくいなくなってきた。理由はよくわかりませんが、アメリカの経済学者は、計画よりも市場の方が効率的であるから経済としてはうまくいくのであるといったことを言いついて、いろいろ証明などしております。こちらの一橋大の経済学の皆様も、そういう主張のチャンピオンでいらっしゃいますが、そのほかにも、革命運動面でもいろいろな行き詰まりというものがありました。それやこれやで非常に調子が悪くなってきたんですね。それと同時にですね、構造主義のようなものが出てきて、マルクス主義が言っていたような単線的な歴史なんてものはないのではないか、従って革命が起こるということは保証されていません、などということを言いましたから、マルクス主義というのはますます守勢に立たされているというわけです。まあこれは私の主観でありますから、皆さんもそう思う必要は全然ないのですけれども、私の理解を言いますとだいたいそういうことです。

#### (4) 構造主義：ヨーロッパ中心主義の相対化

次に、このようにマルクス主義がちょっと調子が悪くなったところを見計らって構造主義というのがワッと出てきたわけですが、これがどんなことを考えているか、を申し上げましょう。実はこの構造主義こそ、ヨーロッパの市民社会が普遍的な文明であると

いうことに対してもっと積極的に反対意見を述べている重要な思想だと思います。というのは、構造主義の立場から見れば、やっぱりマルクス主義というのも同じ穴のムジナだからであります。マルクス主義はどう考えたか。近代市民社会は良いと思った。ただブルジョワ社会の部分が良い。そこでブルジョワ社会を批判すればもっと良い社会にいける。そして、一番良い社会は共産主義社会であり、そういう一番良いところに達するために必ず近代市民社会ないしブルジョワ社会を通過しなければならない。なぜならその社会でしか共産主義革命は起こらないわけだから。故に、地球上の全ての文明は共産主義に達するためには近代化しなければ駄目だ——このように線路は一本道でありまして、出口ははっきりしている。そうすると、マルクス主義は形は変わっているけれどもやっぱりヨーロッパ中心思想ではないか、となるわけです。それに対して構造主義ってというのは、マルクス主義を含めて、ヨーロッパが中心であるとか、歴史はヨーロッパを目指して流れているというような考え方はみんなこれ根拠がないんじゃないの、ということをやったんじゃないかと私は思います。この講演会のテーマから言えば、ヨーロッパ中心主義の相対化についてお話ししなければいけません。しかし、この詳しい中身については今日は時間がございませんので、でき得れば講談社の私の本を読んでいただくとしまして、ポイントを申しませう。まず、植民地が第2次大戦を契機にして最終的になくなった、次に冷戦構造の後、世界がどんどん多極化に向かっている、それからマルクス主義が調子悪くなってきた、そういった現実を受けまして、これに対応する世界認識として構造主義がマッチした、ということではないかと思いますが。これはやや周辺のことですね。そこで、構造主義の原理をさらに使うならば、つまり構造主義の原理を使ってポストモダンの立場にどんどん入ってゆくならば、構造主義の道具だてをさらにバージョンアップして、1のところを普遍性として述べた市民とか主体とか自由とか権利とか理性というものをみんな攻撃してゆくことができる。つまりポストモダンになれるわけです。例えばフーコーのような人が出てきてどう言うかという、近代は普遍普遍と言うけれど、それは普遍ということをやいまくる制度である、だから普遍であると思っているのはその制度の中にいる人たちだけではないか、こういうふうに言いました。それだけではなくて、近代という制度がどのように出来上がっていったかという順番を、解剖学よろしく中世や近世の初頭のあたりからこうなってああってこうなった、と、ちょうど影絵写真のような感じでパチャパチャと見せてくれた。そうすると、その続きがもしあるとするならば、現在もその続きですから、決して普遍ではないだろうという含意があるわけですね。フーコーはそんな仕事をして死んでしまったわけなんですけれども、他の構造主義者やポスト構造主義者を中心として、そういう普遍性は駄目ではないか、の合唱になっている。構造主義がマルクス主義をやったとしますと、ポストモダンというのは、マルクス主義だけではなくて近代主義をや

ったつけんとしているように見えますけれども、ところがどっこいと私は若干思っております。構造主義は先行きとしてマルクス主義ほど簡単に滅びるわけではないと思います。

## §2 特殊性として見た、「西欧」近代

§1では、ヨーロッパというものは普遍的なものを目指す運動であり、それは十分普遍的だったけれどもいろんな問題があった、そして普遍かどうか怪しくなってきた。ここまでお話しを申し上げました。後半の2ではこの話しをさらに押し進めて、ヨーロッパは普遍ということではなくて、これははっきり特殊なものではないか、だから特殊なものとしてヨーロッパがなぜ普遍みたいなことを考えついでしまったかということ进行分析していきましょう——こういう発想の話になります。そこで特殊性としてみた西欧近代、ということをや、言語ゲームとの関連で申し述べませう。言語ゲーム論がヨーロッパの近代に対してどういう突き刺さり方をするかということについて、今日の文脈で言いますと、それはキリスト教を攻撃する方向ではないかと思えます。ヨーロッパの近代はキリスト教を表に出してないけれども、ちょっと一枚めくるとやっぱりキリスト教である。だいたいキリスト教の部品装置でもって出来上がっている。ヒンドゥー教とか仏教は人間が信じるものだと思われてないらしく、あまり宗教の内に入られていない。要するに、ヨーロッパ近代は隠れキリスト教的な部分を中心とした構造になっている。それに対して言語ゲーム論というのは、さすがユダヤ人が考えついただけありまして、キリスト教に対する恨み・つらみ（そういう言い過ぎだ）、キリスト教の弱点みたいなものをよく突くような人間の可能性——キリスト教にならない可能性——がいろいろある、こういうことをうまく論理化したものではないか、と理解できる。そうすると、言語ゲーム論の論理をどんどん追っていくと、ヨーロッパの隠れキリスト教の部分がだんだん脅かされて、ヨーロッパがちょっと違ったものになる可能性がある。こういうことになっているのかな、というのが2部の筋です。

### (5) キリスト教の遺産

キリスト教についても一回復習をしてみましょう。キリスト教は確かに宗教戦争の後大きな顔なくなってしまいましたし、ヨーロッパでは伝統的に王権と教会は相互に独立ですので、世俗的な国家はだんだん教会と関係ないことになってきました。ですから表通りを歩いてないんですけど、実は二重体制になっているわけです。そして、岩波文庫で最近売れていない（笑）「プロテスタンティズムの論理と資本主義の精神」という本（改訳

になったのかな)をよく見ますと、これも通説であるから皆さんよくご存じと思いますが、マックス＝ウェーバーが次のようなことを言っております。プロテスタントの世俗内禁欲ということがあります。世俗つまり商売をしながら信仰するにはどうしたら良いのだろうか、とプロテスタントたちは悩んだ。それにはまず、悪いことをしてはいけないので正直に商売をしましょうとか、怠けてはいけないのでいつでもニコニコ働きましょう、というようなことをやっていたんですけども、その内に、神に救われている人間であるならば当然商売も順調にあって、神様がちょっとウィンクをしてくれるのがわかるはずだ、といった話になってきました。信仰が正しいとお金が儲かる、みたいになってきたわけですね。そうすると、お金が儲からないと信仰が正しくないような感じになってきますから、みんなひっちゃきになって金儲けに勤しむ。このように、論理がだんだんずれていく転換が起こるんですけども、そこをウェーバーはあんまり明確に書いていないんです。と言うよりも、まだ誰も明確に書いてないと思うんです。いずれにせよ、そういう論理のずれというものがあることが資本主義への突破口になったのではないか——これが「プロ倫」、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の話です。これを簡単に言うと、ヨーロッパ人というのは、プロテスタント、それも敬けんなピューリタンか何かにならないとなかなか資本主義社会にはならないよ、という話ですね。そして、ウェーバーが繰り返し繰り返し言うのは、人類社会史上において、近代資本主義社会の一手前まで行った社会は山のようにあったということです。古代にもバビロニアとか、中国もそうだ、インドもそうだ。しかしどれもみな近代資本主義社会にはならなかった。なぜかという、禁欲つまり自分の行動を合理的に組織するという考え方がなかったからである。お金が儲かったら、タイガーバウムガーデンみたいなのを建てたり、飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎをしたり、非常に非合理に振る舞っていたので資本蓄積にならない、こういうことを言っているわけです。

最初習ったときはそうかなーと思います。でも最近、日本のようにピューリタンと何の関係もない国の資本主義があまりにも順調に進んでいるのを見ると、ウェーバーの言っていたことが果して正しいのかどうかだんだん心配になってくる。そこで、しばらく前までモダニストはどういう仕事をしていたかという、日本にもピューリタンみたいな人がいたと指摘してきたわけです。確かに日本はピューリタンと円も縁もないですが、例えば石門心学の石田梅岩をご覧なさいとか、禅宗の鈴木正三をご覧なさいとか、それに類する人を一生懸命挙げてきて、日本も同じだ同じだと主張する、という作戦でいきました。しかし、ちょっとそれは発想が逆じゃないかな、と僕はだんだん思ってきました。つまり、ヨーロッパでは中世を通じてずっと経済活動はまともな人間がすることとはあまり考えられていなかった。近代でもやっぱりそういう節があるわけです。人間はすることがいっぱい

ありまして、生まれた以上、立派な人間として生きていくためには科学者になるのも良い、芸術家になるのも良い。というか、芸術家や科学者の方が遥かに良いし、政治家や法律家も良い。それに引きかえ、企業家とか労働者というのはやはりあまり良くないんです。だから、そういうものをなりたい職業の第一番に挙げて、それに向かって一生懸命やるなどということはちょっと考えられない社会なのです。しかるに、資本主義が成立するためには、企業人としての誇りをもってそういう経済活動に生涯を賭けるという人が大勢出てこないといけない。ヨーロッパでこういう人間が発生するのはよくよくのことだから、そこで宗教の力を借りて宗教的な催眠術というか、宗教的なバックグラウンドでもってそのように人間に無理やり思い込ませた。こういう非常に変てこな世俗内禁欲という強制装置があって初めて経済活動が順調に回転するような社会なのではないか。だから、近代社会の市民ないし人間という考え方と、利潤という考え方とは簡単に結びつかないのであって、それが結びつく装置が必要だったのです。ところがわが国を考えてみますと、会社に就職することにほとんど抵抗がない。政治家やその他のいろんなものがあり、そういうものになりたいけれども、しょうがないので企業人や金儲けになりましょう、という人はあまりいない。むしろこれとは逆に、例えば一流企業に入ったりすると嬉しくてしょうがないというような人が結構いたりして、経済活動にたいして文化的に非常に抵抗が少ない。これはいろんな理由があると思いますが、ヨーロッパの場合、例えば村ないし村落ないし共同体といったものと社会が構成されるところとの間に明確な違いがあって、人種とか、宗教というものを一応踏み越えて社会ができる。こうしてできた社会はかなり人為的なものでありまして、そこでは人間という資格でお互いに対面することになります。だけど日本は革命が一回もなかったし、村がなしくず的に発達したり大きくなったり流れ込んだりして町になりましたから、市民社会というものはあるようでない。その結果、すぐに会社が村になったり家族になるような反転を起こすわけです。社会の中に生きがいを見つけるのは大変難しいんですが、もしそれが家族や村落であれば、そこに生きがいを見つけるのは簡単です。従って日本人の場合、経済活動をするの中に生きがいを見つけるというのは非常に容易である、ということがあるのではないのか。だから、その結果として、プロテスタンティズムの倫理のように無理やり人々のモラル・動機づけを経済活動の方にねじ曲げるために使われるような膨大なエネルギーもいらなかったのではないかと、思います。そういう意味で日本は特殊かもしれないが、逆に言うとヨーロッパが特殊かもしれない。そしてウェーバーに関してはこういった感じで多少相対化して考えていった方がいい。日本はまた別に研究しなきゃいけないと思いますが、たとえて言うとそのようになります。だから、日本の場合、経済活動に人々が向かっている、そしてそれが合理的に維持されている、というのは別なメカニズムによる可能性があるのです。

そこで、キリスト教がなくなってしまいがらもヨーロッパ文明に残している遺産を財産目録として列挙してみましよう。まず個別救済、というのがあります。これは一人一人が、神様に救済される対象であって——簡単に言うと個人主義だということと同じですけど——魂をもっているということですね。この個人主義っていう考え方が、非常に濃厚に西欧近代の市民社会の前提になっている。これはユダヤ教にはない考え方です。ユダヤ教は魂の救済が目的なのではなくて、民族全体が一度に救済されるということが目的ですね。そこはマルクス主義の場合もユダヤ教とよく似ていて、人類全体が、あるいはプロレタリア階級が救済されるのであって、救済される前の日に秘密警察に捕まって撃ち殺された人は運が悪いということで救済されないわけです。

第二に、禁欲があります。これは何か我慢するということとは全然違って、ある目標に沿ってすべての資源を動員して、整理してゆくということです。自分の行為とか物質、それを目的に沿って、無駄のないように組織してゆくことです。そのために時間が非常に重要になってくるわけです。これも経済メカニズムの基本になっています。これは、修道院の中から世俗社会に伝えられた。ところで修道院というのはキリスト教だけが抱え込んでしまった変なものでして、どうも存在理由がよくわからないんですけども、その話しをすると時間がないので止めておきましょう。

それから契約の絶対という考え方です。これはユダヤ教イスラム教キリスト教通じてありますけれども、信仰の根本が神との契約なんです。人間というのは自力で自分を救済する能力がなく、馬鹿で愚かで弱くて罪深くて間違えます。そこで、自分以外の神に助けをもらうということを約束してもらうこととなります。そして、その結果として救済されるという構造になっていますから、この契約がもし履行されなかったら救済されないから信仰が成り立たない。そのためにこの契約は絶対のものでなければならない。この思想は、いわゆる社会契約の考え方につながってきまして、憲法ないし法による国家の管理ということがこの思想の下にできることになる。

また、人格と行為の区別があります。これは魂と行為の区別がもとになってるかもしれませんが、人間はいくら良い行為を積み重ねても、決してよい人間になったり救済されたりしない、というのがキリスト教の考え方です。つまり人格と行為が区別されるわけです。人は世俗的な社会では行為に対して責任をもち、神の前では人格ないし良心に対して責任をもち、というように分解している、このように自分の内面と行為を区別したり分析したりすることが大切で、そういうことがなければ行為を合理的に組織する、人々の気持ちや内面と無関係に行為だけを合理的に配列したりする、といったことはできないわけです。こういう可能性を与えているのがキリスト教である。

この他に良心、あるいは宗教的寛容があります。宗教戦争の後、異なった信仰をもつ人

が一緒の町や村に住むことになりました。そうすると、全然違うセクトの人間が住んでいて違う信仰をもっているわけですから面白くないわけです。信仰の話しなんかしたら喧嘩になってしまう。そこで、そういうことはしない。彼は彼の良心に従って彼のやり方で生きている。私は私のやり方で生きている。私の方が正しいと思うけれども、それは相手には言わない。それは良心の自由の問題、お互いにノータッチである。社会関係の中ではそれは問題にしない。つまり自由が確保されたことと同じです。このようにして良心の自由という制度を発明した。これもキリスト教の中に幾つものセクトができた、ということと無関係ではないと思います。そして、良心の自由というものがなければ、真偽の制度つまり科学が非常に発達するということもないわけです。

レジュメの最後に真理が挙げてあります。それは究極の真理があってみんなで協力して努力してゆけばいつかそれを知ることができる、というような信念が成立するということです。

こういうものまで含めて、我々が自分たちの制度としているような、それを無視してしまうと自分たちの社会がごちゃごちゃになってしまいそうに思われるものの多くは、キリスト教から由来しているわけです。そして、こういうものがキリスト教からきているということは、仏教や儒教によってではこういうものを必ずしも同じ形では与えてくれない、ということですね。中国とか日本などが近代化する場合に大きな問題がある、というのがだいたい近代主義者の指摘だった。その指摘はだいたいにおいて正しいと思いますが、そのまま鵜呑みにしてしまうと非常に危険だと思います。そこで私はこう考えるわけです。今までのモダニストによる非キリスト教社会・非西欧社会の分析はやっぱりヨーロッパの概念装置を使いますから、隠れキリスト教がまぎれこんでいてどうしてもヨーロッパ中心的になる。そこで逆に、言語ゲーム——言語ゲームは脱キリスト教的な概念装置ですから——でもって分析してゆけば、日本・中国・インド——つまり非西洋圏とヨーロッパというものを対等な、二つの現象として記述することができるのではないかと。そして言語ゲームは、そういった現象を記述する普遍言語となり得るのではないかと。

#### (6) 言語ゲーム (言語の意味は用法にある)

言語ゲームというのは、先程申しましたように、一つのポイントは言葉を用法として理解するということでした。例えば、プラトニズムないしギリシャの考え方でもいいし、中世神学の考え方でもいいんですけど、言葉が人間の用法に根拠をおいて意味をもっては全然いけない。人間は罪深い存在だからそうであってはいけない。言葉はもともと神様がもっていたものです。そして、神の中では理念と存在、イデアと実在は一致していますから、そこで意味は完全に確定している。そして神様がそれを人間に教えてくれた。しかし人間

は馬鹿ですから、それをあんまりうまく使いこなせないで、いろんな間違いが起こる。それでも、神の下ではそういう矛盾はない、こういう前提でできているわけです。従って神の下では言葉は完全である、その完全な形は人間には見えないけれども一つだけ見える形がある。それは何かというとバイブルである。バイブルはギリシャ語とかヘブライ語で書かれていますけれども、あれは神の言葉でして、完全な言葉です。一つの欠陥もない。このように、言葉の可能性の極限というものがテキストの形で示されている。では、そのテキストの意味はどのようにして確定されているかということ、神の下ではテキストの意味というのは明々白々に確定している、ただ人間に見えないだけだ、とこうなっているわけです。ですから、人間の中で比較的頭の良い教会の人に教えてもらう、という順番になっている。ところが、言語ゲームのように言語の用法が言語の意味を決めるとしたならば、用法と無関係に、例えばバイブルなりテキストの中に意味があるとか、そこに神があると書いてあるから神がいるんだとか、そういうことは絶対あるはずがない。だから、キリスト者が信仰に入る根拠として、奇蹟を信ずるとかバイブルとか、幾つかの手掛かりがありまされども、そういうものが手掛かりにならなくなるということがあると思うのです。

こうして、構造主義のところでもテキストの解体ということが起こるんですけども、言語ゲームの下でもまた別な意味でテキストの解体が起こります。言葉の意味は用法なんですから、神の意味、あるいは神ということも、神という言葉の用法であることになります。これは、信仰者にしてみればとんでもないことです。キリスト者の前提は神が本当に実物として存在し、ペルソナとか人格をもって人間のことを睨みつけており凄く怖い、ということです。そこから神の存在を信じるかどうかの二者択一の前に立たされて、という具合に話が始まっていく。これに対して言語ゲーム論は全然別です。神なんているかいないか関係なく、とにかく人間がいろんな言葉を使っていて、ただある人たちが神がいるというような言葉遣いでもって相互関係を作り始めた、そしてバイブルを作ってしまった、ということになるわけです。バイブルも言葉の用法の一種ですから、ある人が書いて別な人に渡したものです。つまり人間以外に言葉を使うものはないわけです。神が言葉を使うというアイディアは言語ゲーム論にないですから、宗教というのはマルクス主義が批判した以上に、一種のイデオロギーみたいなものとして見えてくる。それは言葉の用法がもたらすところの錯覚である、となるわけです。そうすると、これは反宗教である、あるいは最大の無神論であると言っても良いかもしれないけれども、逆に言えば、人間の行動に即した分析方法であるということになるのではないかと思います。言葉の意味が用法にあるとすると、キリスト教が言っているようなテキストの権威というのは当然成り立たない。そして、テキストが人間を支配する——これは宗教あるいはキリスト教のスタイルだったけれども——ということも当然なくなる。テキストに人間が支配されるなどという

のは馬鹿馬鹿しいことです。人間が用法によって自分を支配すれば良いんです。そういう意味から言うと、ヨーロッパの中にいろいろ残っていた隠れキリスト教の部分——それは一つの可能性に過ぎないわけで、例えば日本はそういう可能性になかったわけですが——をいちいちひっくり返して、もうちょっと大きな可能性と文脈の中に置き返すことができるのではないか。

私が今まで行ったのは仏教の分析です。それからイスラム教もちょっと検討しました。それから儒教はまだやっておりませんが、このような、かつてウェーバーがやった研究対象をウェーバーの制約とはまた違ったところで調べていこうとすることです。

西洋がもっている暗黙の約束であったものの一つに、言語の記述公理というものがあると思います。これは、先程言った写像理論とよく似ていますが、この世の出来事は何であれ言葉で表現することができる、というような信念というか原理みたいなものです。こういう原理がないと、小説を膨大に書いてこのような原理を明らかにしようとか、科学を追及してこのような真理を明らかにしよう、などという発想にならないわけで、この記述公理をみんなが信じているために小説——つまり文学や、科学という制度が成り立つと思うのです。仏教というのは、大変面白いのですがこの記述公理に対する反対物なんですね。仏教は、すべての現象が言語で記述できるとは考えない。その最たるものは悟りというものであります。悟りというのは一番価値ある状態であり、この世に人間が存在する理由を与えるほど価値があるような究極の状態なのですが、その究極の状態がどんなものかということ記述できるとは仏教徒は考えていないんです。あるいは、記述したと主張するものがないですね。あるとすれば比喩です。つまり記述できないわけです。ではなぜ、記述できないのに悟りというものがあるって人々は悟りを目指して運動するのであろうか。これはヨーロッパ的に考えれば大変不思議です。あるかないかわからないものを求めてゆくわけですから。こういう形の運動はある意味で不思議なんですけれども、それは不思議でなくて、言語ゲーム論的に考えていけば当然人間にあり得る一つの可能性なんだ、と理解できる。ヨーロッパの人間が見れば神は存在するのに悟りは存在しない、だから不思議と見えるわけですけど、言語ゲーム論的に考えれば神も言葉の用法、つまり存在も言葉の用法であって、言葉の用法の中に結ぶものである、そして悟りもまた、言葉の用法の中に結ぶ一つのものである。こういう意味では、キリスト教における神と悟りの性能は同じだ。だから、悟りが実在する、と考えていくのではなくて、悟りを尋ねたり誰が悟ったか、悟りをどういうふうにして実現するか、ということをめぐる人々がコミュニケーションするという状態から出発する、と理解してゆけば、その当事者にとってみれば、悟りは明らかに実在してしまう——このように分析してゆけるのではないか。その悟りという価値をもっていたところへブッダなる特定の個人が悟ったという噂が立ち、そのブッダを中心にしてブッ

ダのまねをするという一つの運動が起った、と記述できるのではないか。これは人間にあり得る一つの可能性です。

それから、イスラム教はキリスト教とある意味でよく似ているんですけども、また違った面もある。イスラム教というのは、言語ゲーム論的に考えますと、世俗生活を厳密にルールによってコチコチに固めてしまう。このルールというのは神がコーランによって与えた日常生活のテキストですけど、断食、つまりラマダーンとか、礼拝の規則とか厳密なルールがいっぱあります。このルールを守ることが救済の必要条件であります。それに人間が完全に従うのはできない。そうするとホメイニ師みたいな法学者が現れて、ルールをめぐる問題をいろいろ裁いていく。そういうシステムであると考えると非常に明快に記述できて、いろいろイスラム教固有の現象もかなり面白く解けてゆくという可能性があるように思われます。それから儒教の場合を考えてみます。これは中国のことをよく考えないといけません。やっぱり儒教の場合もキリスト教と大変違ったロジックをもっている。キリスト教の場合は、人間のもっている権力と人間が作るテキストは必ず分離する。正真正銘のテキストは神のテキストであるのに対し、権力は暫定的に人間がもっているものです。ゆえにテキストと権力は分離されなければいけない。そこで権力をコントロールするためにテキスト、つまり法律を使うというアイディアが出てくることとなります。しかし、儒教の場合は権力とテキストは完全に一致している。テキストというのは政治的技術なわけ。だから文学も政治、つまり権力になるし、音楽・芸術もみんな政治の問題になってくる、こういう全然違ったフォーマットをもっているわけです。そして、文字を含めて、民衆の幸福を追求する社会形式を全土的に統一してくるというのが政治の根本的なテーマになっている。そういうフォーマットではないかと思えます。もっとも、儒教についてはあまり分析していないので、危険なことを言うのはこの程度で止めておきましょう。とにかく、このようにして、比較宗教学的、比較社会学的に言語ゲームのモデルを応用してゆくという可能性があるのではないか、これが私の今の作業仮説の一つです。

#### (7) 西欧近代制度の未来に向けての可能性 (終わりに)

そろそろ時間が迫ってきましたのでまとめたいと思います。それでは、西洋近代は果して普遍的・一般的だったのか、それとも言語ゲーム論なり他の議論が言うように普遍的ではなかったのか。これは私から言えばイエスでありノーであるような問いである。これは抽象のレベルの問題だと思う。つまり、隠れキリスト教に代表されるようなヨーロッパの特殊性を隠した形でのヨーロッパ文明であれば、これはやはり非常に特殊です。ですから、それをそっくりまねしたり、同じ現象が日本で起こったり、というようなことはあまりあるとは思わない方がよい。しかし、その隠れキリスト教をさらに要素にバラバラに分解し

てもうちょっと普遍的なレベルで考えてみると、明らかに起こり得べき違った新しい運動になるのではないか、という気がする、というのが私のちょっとした予感です。そして、いわゆる近代を動かしていた制度的な部分、運動を記述することは、同時にそれを一つの制度としていろいろな社会に突きつけていくという要求にもなるわけですから、非常に実践的な意味があるのではないかと思います。

—以上。

NOTE この講演録は、1988年11月6日に一橋祭企画として、一橋大学社会科学研究会の主催で開かれた橋爪氏の同タイトルの講演をもとに伊東浩司・橋本直人・森茂樹の努力により原稿化したものである。橋爪氏の許可を得て、ここに掲載した。(福島)